２０２２年１０月２３日　説教『愚かな金持ち』青戸教会
ヨブ記３８章１～１８節、ルカ福音書１２章１２～３１節

高橋克樹牧師

本日はヨブ記とルカ福音書の両方を取り挙げてみます。ヨブ記によれば、ヨブは神が正義に基づいて正しく行動していないと繰り返し訴えてきました。ですから、自分の嘆きと抗議にまともに神は答えるべきだと主張して譲りませんでした。ヨブは沈黙し続ける神に我慢ならないのです。ヨブは友人たちとの議論を打ち切ると、神に対する長い抗議の言葉を投げかけ、最後には神を敵とみたてて、神に告訴状を提出するという挑戦的な言葉まで口にするようになります。これに対して、ずっと沈黙していた神はこの挑戦を待っていたかのように３８章でヨブに初めて語り始めるのです。その冒頭で神はヨブのことを、創造者の『経綸を暗くする』者（２節）であり、『知識もないのに言葉を重ねる』者（２節）と糾弾します。そして、ヨブに対して①神の創造を目撃する立場にあったのか、②創造の知恵に対する理解力を備えていたか、と問います。これは被造物であるヨブが神に匹敵する存在者なのかと問うたものです。到底ヨブが答えられるはずはありません。ヨブが答えられない問いを神が発したことの意味をまず受け止めたいと思います。

一貫して沈黙していた神が、３８章で初めてヨブに語り始めるのです。それまでヨブの苦悩の訴えになに一つ答えなかった神が、ヨブに天地創造のことを語り始めるのです。しかし、その内容はヨブの苦悩に直接答えるようなものではありませんでした。肩透かしのように思える発言が繰り返されています。ヨブ記を読んできた私たちも、神の語る内容に不信感を感じるのではないでしょうか。神は『私が大地を据えたとき（＝創造の業をなしたとき）、お前はどこにいたのか。知っていたというなら、理解していることを言ってみよ』（４節）と詰問します。けれども、神が創造の業を為していたときにはまだ創造もされていなかった人間に、どう答えろと言うのでしょうか？

私たち人間は自分がこの世で生きていることに気づいたときは、世界はすでに創造されてしまったあとです。それは映画館に途中入場してストーリーがなかなか理解できずにイライラ感を抱いてこの世界を観ているようなものです。この神の問いかけは、自分が関与していないことに対して、責任を問われているような気持ちにさせる言葉ですし、不条理な問いかけと感じさせるものです。『一体お前は何者か』（２節）と創造主である神から言われても、被造物であるヨブは返答に困るだけです。逆にどうして答えられないことを問うのかと聞きたい気持ちに襲われたことでしょう。そもそも神はなぜ正義を行使しないのかというヨブの根本的な問いを神は全く無視し、ただただ創造の業について問いかけるだけで、チグハグ感を感じさせます。しかし、見方を変えるならば、かつてヨブが『罪と悪がどれほどわたしにあるのでしょうか。わたしの罪咎を示して下さい』（１３章２３節）と、大胆にも神によって自分の無罪を証明しようとした際にも、神は全く答えられなかったのです。この神の対応は、ヨブが罪を犯したから災難が降りかかったのだと考えた友人たちとは対照的です。神は因果応報で人間の不幸の原因をみていないのです。

人生で出会う苦しみは、ときに人間に対する神の愛をうたがわせますし、神が創造したこの世界を無意味なものと見做してしまうことが起こります。ところが、３８章で神が語りはじめたとき、ヨブの苦しみの原因を神が解明してくれることを期待していたのに、全く予想していなかった話が展開されたのです。神が天地創造のみ業を発揮しているときに、ヨブがどこにいたのかと問われても、ヨブはまだ創造されていませんので、当然答えることはできません。つまり、被造物である人間は自分の苦悩の原因を解明したいのですが、神はそれに答えを与えないのです。ヨブは、神は正義に基づいて行動される方だから。当然、自分の苦悩の原因を明らかにしてくれることを期待しているのですが、それには応えられない。ヨブのように神に回答を求めるのは、苦しみの原因が解明されたら、苦しみは解決するかのように考えているからです。でも、神は答えられないのです。さらに、ヨブが求めていた罪の潔白性についても何も言及しません。神はただただ創造のみ業を行う者としてのご自分の「自由な」御業と「自由な」意思について語るだけです。ただただヨブに対してご自分が持っている「自由な」力の行使を語って聞かせるだけです。そして３９章１節以下では山羊と雌鹿が子を産む「時」が神のご計画の中にあることを語っています。岩場や高山で生活をする彼らの繁殖もヨブの関与できない神の摂理、神の御手の中にあり、その子らもほどなく自立して神の祝福のうちに、生を営むことになるといいます（１～４節）。しかも、５～８節で野生のロバの野生性は人間には手に負えない奔放さであるけれども、その「自由さ」としたたかさも神の支配するところであると指摘します。つまり、人間には神の「自由」に対して何らかの制限ないし注文をつけることはできないと言うのです。５節～８節では、野生の動物の自由な行動が述べられていて、野生の牛は極めて人間に馴れさせることが困難な動物であり、野生のロバと同様に扱い難い神の被造物だということが語られます。このように、人間がコントロールすることのできない事柄が次々と指摘され

ます。生まれた時から人間に飼育された牛は人間のために働く存在になりますが、野生の牛に人間への親和性を与えなかったのも神の意志だというのです（９～１２節）。１３節以下では駝鳥の走力が馬をも凌ぐことについて言及します。これも不思議な神の配剤である（１３～１８節）が、一方で、駝鳥は自分の雛を自分の足で踏みつけてしまったり、自分が産んだ子が死んでも平然としていることも、『神が知恵を貸し与えず、分別を分け与えなかったからだ』（１７節）と、被造物から自由な神の存在を語って聞かせます。

さて、ルカ福音書１２章１２節以下の「愚かな金持ち」の話ですが、この金持ちはイエスに兄弟に遺産を分けるように言ってください、と言っているように、財産を手に入れる可能性が高いことがわかります。たとえば、兄弟２人だった場合、長男は３分の２、二男は３分の１の財産分与を受ける権利があります。どちらにしても、この人物は財産を受けとる権利があるのです。そういう人物に対して、イエスはある金持ちの話をするのです。この金持ちの畑の収穫が思いがけないほどの豊作だったのです。その収穫物を納めるための倉が小さいことに気づき、倉を壊してもっと大きい倉を建てて、そこに納めておけば、この先何年も生活の心配をしないで食べたり飲んだりして楽しめると考えたのです。しかし、２０節にあるように、神は『愚か者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いったい誰のものになるのか』と叱責され、さらに神のよって「自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ」と言われてしまう話をするのです。思いがけない富を得た金持ちの話は、思いがけない不幸に見舞われたヨブとは対照的ですが、要は神のご計画の中で思いがけなく自分の予想を超えた出来事が起こった時に、それに対してどのような態度を人間はとるべきかという問題なのです。ヨブは自分に明らかな罪咎がないのに不幸な病気の状態になったことに対して神にその原因を説明してくれと訴えています。一方、ルカ福音書の譬えに出てくる愚かな金持ちも、自分の予想を超える豊作でたくさんの収穫物が手に入ることになったので、この先何年も生きていくうえでの気苦労がなくなったと喜んだのでした。しかし、今夜命が取り上げられることが起こることに気づいていない愚かさが暴露されているのです。

神は御自分の自由な意志に基づいて、この世の事柄に関与されている。その関わり方は人間には理解不能なことも多々あるのです。問題は、自分に起こった予想外の出来事に直面して、どういう態度をとるかなのです。ヨブは自分の苦難をめぐって神に対して激しく正義の実行を迫まっているのですが、被造物である人間が考えるような正義は、実は小さな価値観の枠組みの中だけのことだというのがここでの神の立場なのです。ヨブの潔白性の証明と正義の実現要求も、神の経綸の中で受け止め直す必要があることを、さまざまな自然界の事例を用いて納得させようとしているのです。それが３９章の内容です。ですから、友人たちが展開したように、ヨブに隠された罪があるから彼は苦難に出遭っているのだというような因果律に基づいた応報思想も、「神の自由意志」を前にしたとき、何の意味も持っていないことが明らかにされています。結局、人間が悪を行おうとも、善を行おうとも、神の尺度からするならば、いずれも神の御旨を推し測る尺度にはならないことが繰り返し確認されているのです。愚かな金持ちも、たくさんの収穫物が手に入ったことで自分の人生の安泰二万則しているのですが、今夜にも命を取り上げられるかもしれない人生の危機を想像だにしていません。

現代の日本における「自由」に対する認識は、「自分がしたいことを行い、自由意志に従って生きるが、他人の権利を侵害しない範囲で行う」というのが大方の認識と言えるでしょう。けれども、他人に迷惑をかけずに、他人の権利を侵害しなければ自分の思いのままに行動してもいいのか？　自分の意志や好みが１００％貫徹した世界というのが果たして自由なのか？　自分の自由な意思が優先されるので、自分がしたいときだけ奉仕や参加をするという生き方は、実は異質なことに出遭うことをあらかじめ拒絶した、いわゆるオタク的な自由なのではないか。こういう考え方や生き方を行動原理とするのは自由ではなくて、むしろ不自由の極みであって、この不自由さを自由と思っている人はどこまでいっても「自分」としか出会わない世界で生きているのではないか。自分以外の未知な存在に出遭うことや、異質なものに出遭って自分自身が変容していく可能性を閉ざしているのではなか。なぜなら、そこにあるのは「果てしない自己肯定」だけだからです。しかし、私たちは本当の意味で自由が得たいのです。たとえば、人類が結婚をして子供を育て、やがて死んでいくことを繰り返すのは、人が自分よりも大切なものと出遭いたいからです。それによって自分を相対化し、「自分から自由になる」ことを無意識のうちにも目指しているのです。いつの時代でも一番厄介な存在が自分自身です。自分という重荷を背負っていることから如何に自由になるかは人生の課題ですが、神の御旨を考えてみる営みの中に、実は自分がどのように生きていくべきかという姿勢が形造られてくるのです。

2